

神戸三田キャンパスからみる関西学院史

関西学院院長補佐、総合政策学部准教授・宗教主事 村瀬 義史

神戸三田キャンパス（KSC）設置から30周年の今年4月、関西学院大学は、KSC近接地にインキュベーション施設「Spark Base」と学生寮「創新寮」、そして市民の方々も利用できる商業施設によって構成されるCo-Creation Village（C-ビレッジ）を開設しました。本学の教育・研究を核としつつ、自治体・企業・学校・地域住民などの多様なアクターが交流・協働し、起業家の育成と研究成果の社会実装、そして地域課題の解決に向けた取り組みを進める実践拠点になることが期待されます。

協働によって従来にはない新しいものを生み出す姿勢は、KSCにおいて大切に伝承されてきました。原田の森～上ヶ原という一つの拠点で百年以上を歩んできた関西学院が、21世紀の新たな学院の発展を期して初の第二キャンパス、KSCを設置し、学際的研究により地球規模の問題解決のための政策立案をめざす総合政策学部を開学したのは1995年4月のことです。

同年1月17日に発生した阪神・淡路大震災による悲しみと混乱が広がる中、「自然と人間の共生、人間と人間の共生」を学部理念に掲げる総合政策学部が一期生396人を迎えて始動しました。国際的な人脈も駆使して集められた多様な分野の教員陣が協働し、とりわけ草創期において、従来にはない新しい教育・研究を意識的に開拓したこと、学生たちも学びを生かし行動を起こす意欲にみなぎっていたことが様々な形で語り継がれています。



神戸三田キャンパス全景（2025年5月、撮影：藪口雄也）

その後、2001年に理学部が西宮上ヶ原キャンパスから移転して02年度から理工学部へと改組され、KSCは二学部体制となります。それぞれの学部の改編・発展と共に、講義・研究棟が増築されていきました。13年には関西学院

院初のアカデミック・コモンズが建設されました。ここは学部の垣根を超えた学生・教員による新たなつながりとアイデアの創出を促すとともに、学生主体の独創的なプロジェクトを支援するアクティブラーニングの場です。そして21年、長く二学部体制であったKSCは、四つの理系学部（理・工・生命環境・建築）に総合政策学部を合わせた五学部体制へと生まれ変わりました。KSCの学生総数は学部生5,646人、大学院生574人にのぼります（2024年度）。

以上に素描したKSCの発展は、時代の要請に応えるべく改革と挑戦を続けてきた関西学院の姿勢をよく表すものであり、多くの方々の祈りと努力の賜物であることは言うまでもありません。しかしこのような研究教育の枠組みの変化と拡張の背後で、キリスト教主義に立脚する関西学院としてのアイデンティティが不断に追求されてきたこと、また、「上ヶ原ではないほうのキャンパス」であるゆえの、そして郊外のキャンパスならではの苦勞を乗り越える学生・教職員の様々な工夫がなされてきたことも、KSCの歴史と気風の形成に不可欠の要素であると言えます。

KSC史は136年の学院史における最近の30年間ですが、この期間は、KSCに続いて六つのキャンパスが開設され、学部・研究科が増え、幼稚園、短期大学、初等部、千里国際学園の諸学校が加わり、構成員の「関学ライフ」が急速に多中心的になり、学院史を構成する潮流がより多元化した時代でもあります。奇しくも同時期に進行したICTの発達とコロナ禍が生み出した「ニューノーマル」は、地理的には離れている各キャンパスをより近づけ、互いに関心を持ち、関西学院が一体感を保って活動を進める上で大きな助けになってきました。

約3万人が学び働く関西学院の各パートの活動は多忙を極めており、学院全体のミッションや建学の精神は忘れられがちになります。それは一部の人だけが意識していればよいものではないはずです。よりよく使命を果たすために大小さまざまな改革を今後も続けていかねばなりません。が、時流と変化の中で関西学院としての命を失ってしまわぬよう繰り返し原点に立ち戻ることが、関西学院の現在を担う私たちにとって大切ではないでしょうか。

（むらせ よしふみ）